

沖縄県うるま市沿岸に設置された護岸の銃座の調査

横尾 昌樹（うるま市教育委員会）・仲田 眞一郎（知名町教育委員会）

はじめに

太平洋戦争が終結し 78 年が経過した現在、戦禍を生き抜いた経験を直接聞くことができる機会は非常に少なくなってきている。また、戦争を物語る遺構や文化財は、土地開発や社会環境の変化により、残し続けることが困難になってきている。本稿で対象とする護岸の銃座もその一つである。当遺跡は、老朽化した戦前の護岸の改修工事に伴い緊急発掘調査が行われた遺跡であり、調査後には遺構の大半が無くなった。

本稿は、この発掘調査成果と、遺跡に関するより多くの情報を残そうと実施した周辺の聞き取り調査成果を整合し、当該地域における護岸の銃座を中心とした戦時中の時間的推移をまとめた成果報告である。

1. 護岸の銃座設置の背景

うるま市は、沖縄本島中部の東海岸沿いに位置し、東南部に延びる勝連半島の北方・東方海上には有人・無人を含め、藪地・平安座・宮城・伊計・浜比嘉・南浮原・浮原・津堅の 8 つの島々が連なり、現在、そのうち 5 つの島は海中道路や橋によって結ばれている。2005(平成 17)年に具志川市、石川市、勝連町、与那城町が合併して誕生した市域には、先史時代の洞穴遺跡や集落遺跡が存在し、世界遺産勝連城跡を代表とするグスクも数多く存在する。

現在の沖縄県は、19 世紀まで独立した琉球国であった。明治時代に入り、明治政府により琉球国が解体され琉球藩となり、その後、1879(明治 12)年に廃藩置県によって沖縄県へと行政区分が移行した。

沖縄本島では、1930(昭和 5)年の台風襲来により農作物に大きな被害が出たため、潮害による農作物への影響が甚大であった具志川の海岸に位置する下原地域では、同年に「上江洲下耕地組合」により、排水・農道・護岸・堤防構築工事が行われ始めた。護岸堤防工事は 1933(昭和 8)年に完了し、護岸堤防竣工後は潮害がなくなり、排水路整備により農作物の安定的な生産が可能となった。

その後、1940 年代に入り太平洋戦争の時代へと突入すると、南西諸島の防衛強化を目的として沖



第 1 図 遺跡の位置図

縄本島に司令部を置く第三二軍が、1944(昭和19)年3月22日に創設された。『具志川市史』によると具志川地域には、独立混成第四十四旅団第十五連隊(球第七八三六部隊)、第二十四師団歩兵第八十九連隊(山三四七六部隊)を主とした日本軍が各地に駐屯し、本島東海岸での陣地構築を開始した(具志川市史編さん委員会2005a)。地域住民も動員して具志川各所に壕や砲台、指揮所、兵舎、炊事場を構築した。具志川には当初、独立混成第四十四旅団第十五連隊が駐屯しており、その後第二十四師団歩兵第八十九連隊に担当が変



第2図 護岸竣工記念碑(昭和9年設置)

わっている。1944(昭和19)年7月16日に通達された「独混十五作名第八號」には部隊の主力は沖縄本島中南部に陣地壕を構築し、陸海軍と共同で米軍を消耗させることや、地域住民に協力させて、担当区域の沿岸部に陣地壕を構築する旨の指令が出されており、この時期から沖縄本島での消耗戦を想定した作戦が展開された。

この頃に海岸側の護岸を利用して銃座が造られた。銃座は護岸の頂部のコンクリート部分を大ハンマーなどで「八の字」状に割り、ここに銃を固定し上陸してくる米軍を狙うというものであった。

2. 護岸の銃座の発掘調査

(1) 発掘調査方法

うるま市教育委員会により、平成24年度から令和3年度にかけて1933(昭和8)年に造られた護岸の改修工事に伴い、護岸上に設置された銃座の発掘調査が行われた(うるま市教育委員会2016、2023)。

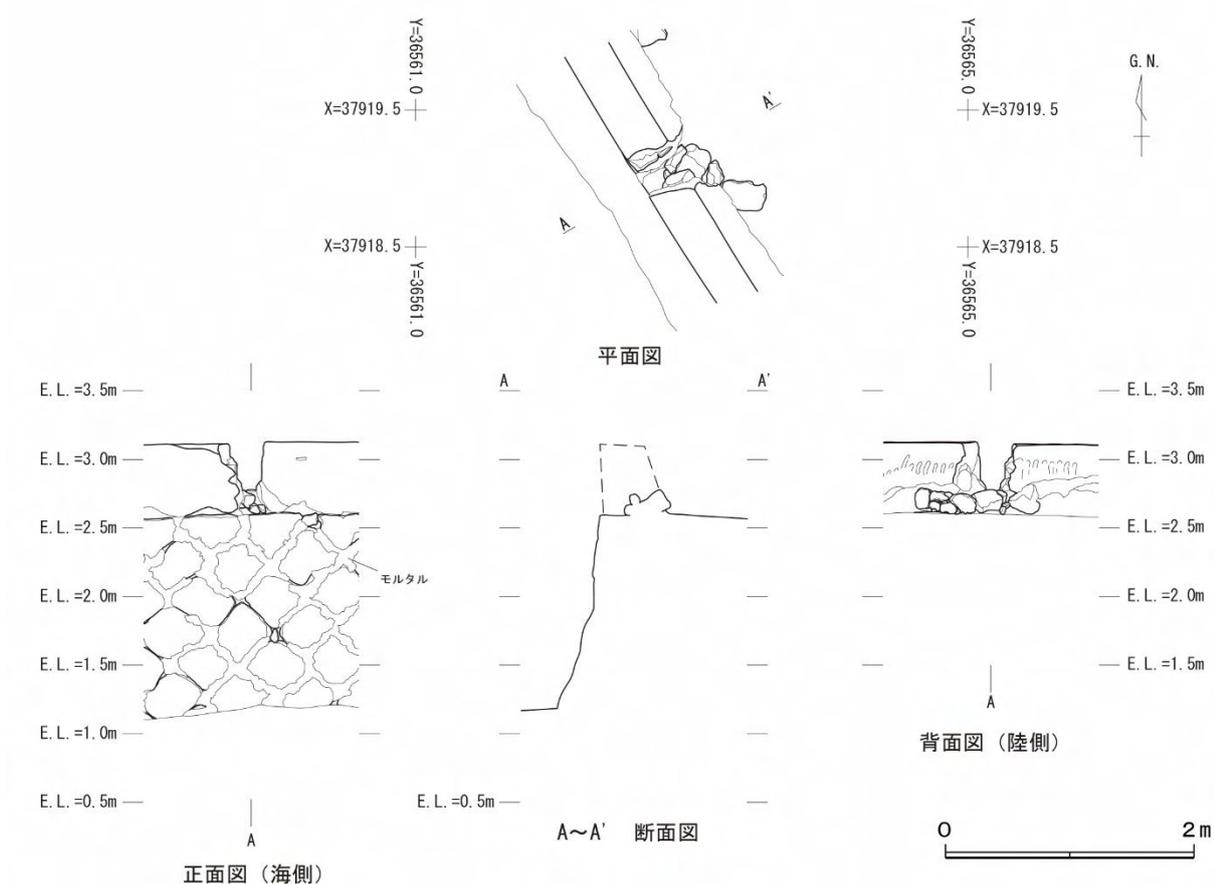
発掘調査区域は、前原地区から川田地区にかけて設置された現存する護岸の銃座の全域である。今回の発掘調査後、調査対象となる護岸及び銃座はすべて破壊されてしまうが、一部工事範囲から除外される箇所位置する銃座は残される。

調査にあたり、銃座各基に番号を付け整理した。番号については前原地区に位置するものは頭文字の「M」を先頭に付け、続く各地区のものも同様とし、豊原地区は「T」、塩屋地区は「S」、川田地区は「K」を付け、続けて地区ごとに連番で番号を付した。これにより、今回の調査の対象となった銃座は、前原地区は49基、豊原地区は10基、塩屋地区は14基、川田地区は40基であり、全部で113基の銃座を調査した。



第3図 護岸に設置された銃座

護岸の現況は、周辺の開発や環境の変化とともに一部壊され、銃座部分がモルタルで埋められている箇所



第6図 護岸の銃座(K-42)の実測図面(うるま市教育委員会 2023)

のものも半数近くみられ、中には30cm以上のものも数基存在した。このように銃座は概ねのサイズは共通しつつも、地区によってばらつきがある。これらは個人の作業レベルの差なのか、銃器に合わせていたのか、詳細は不明である。しかし、後者については後述する聞き取りの中で、小銃と機関銃の銃口は若干の差異がある証言がなされているため、銃器の種類によってサイズを変えていた可能性は十分に考えられる。

銃座の間隔は、大半が10mの範囲で収まるよう均等に配置されていた。前原地区～塩屋地区の配置において、塩屋地区は10m、豊原地区は20m、前原地区はM-1～M-7までが10mで残りが20m間隔であり、川田地区は、基本的には10mの等間隔であり、2種類の間隔を交互に配置していたことが確認できた。このことから護岸の銃座の間隔は、2種類の間隔を交互に配置するが、主体はあくまで10mの細かい間隔のもので、その合間に20mの大きな間隔を取る地区を設けていたと考えられる。

②刻み込まれた文字について

護岸の上に刻み込まれた文字を確認した(うるま市教育委員会 2016、2023)。前原地区で6箇所、川田地区で5箇所、全部で11箇所確認した。これらについて現地で拓本を採り、記録した。判読できない文字が多いが、判読でき護岸の歴史について有効な情報が刻まれている箇所もあった。

前原地区の護岸上部の文字情報は、「與儀政徳ガヌリマシタ」や「昭和七年四月」、「昭和七年五月四日」と刻まれたものが確認されており(第1表、第7図)、これらの年月日等から太平洋戦争時のものではなく、戦前の護岸堤防構築の際に刻まれたものと考えられる(うるま市教育委員会 2016)。

川田地区の調査では5種類の文字情報が見つかったが(うるま市教育委員会 2023)、判読できる文字は少なかった。その中で特筆するものとして「大田」と刻まれた文字情報があり、文字が掘られた時はこの地区がまだ大田であったことが考えられる。川田が大田から行政的に独立したのが、1941(昭和19)年であることを踏まえると、戦前の護岸堤防構築の際に刻まれたと考えられる。

第1表 護岸に刻まれた文字一覧表

No.	地区	位置	文字
1	前原	M8-M9	□□□□□紀 昭和七年四月
2	前原	M10-M11	沖一
3	前原	M12-M13	昭和七年五月四日
4	前原	M14-M15	與儀政
5	前原	M14-M15	□
6	前原	M14-M15	與儀政徳ガヌリマシタ
7	川田	K36-K37	① □□□
8	川田	K37-K38	□□□□□□
9	川田	K37-K38	日□本
10	川田	K41-K42	日本□
11	川田	K41-K42	大田

※表内の□は判読不明文字を表す



第7図 護岸に刻まれた文字の拓本(縮尺不同)
(うるま市教育委員会 2016)

③ 掩体壕(タコツボ)について

掩体壕の残穴の検出を目的として、前原地区(M-6、M-32)、塩屋地区(S-11、S-13、S-14)、川田地区(K-11、K-23、K-38、K-42)で縦2m×横2mの調査区を基本として試掘調査を行った(うるま市教育委員会 2016、2023)。前原地区、塩屋地区では遺構は検出できなかったが、川田地区のK-38とK-42の陸側で護岸裏込めの海砂層を掘り込んだ土坑が確認された(第8図)。これらの土坑の平面形状は円形と楕円形を呈し、断面形は急な傾斜をつけるものと緩やかに下るものであった。直径は、K-38は120cm、K-42は90~130cmであり、深さは、K-38が47cm、K-42は21cmであった。土坑は正面に銃座がくる位置に設けられており、土坑底面から銃座の底面までは約1.1~1.2mの高低差があった。

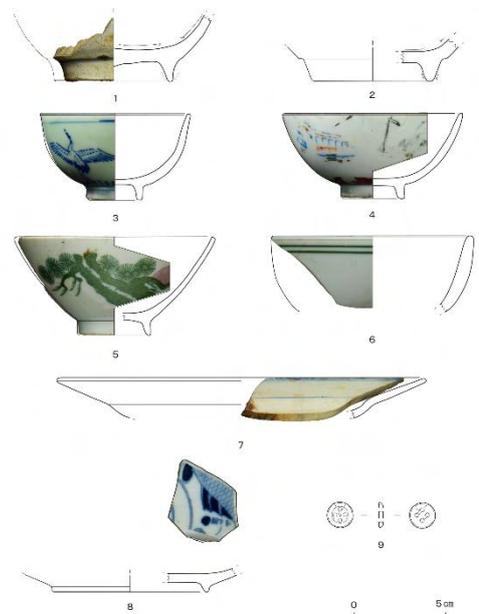
これらの試掘坑内からは近現代の陶磁器片・金属製品・ビン類・ガラス片などが出土した。K-42の試掘坑からは、口縁外面部に二条の緑色の圈線が巡る戦時下に製作された日本軍の統制磁器片が出土した(第9図)。

掩体壕は、県内においては沖縄本島及び周辺離島、八重山諸島等で確認されている。宜野湾市の神山古集落では、良好な状態の掩体壕が6基確認されており、その内3つは足掛け用の窪みがみられることから、小銃用の掩体とされている(沖縄県立埋蔵文化財センター2019)。平面形は、円形や楕円形、長方形を呈し、直径はほとんどが100cm前後だが、長方形のものは長軸が180cmである。深さは浅い遺構で50~70cmであり、深い遺構は100cmを超えている。その他にも渡嘉敷島の北山の陣地壕群(沖縄県立埋蔵文化財センター2015)や石垣島の白水の戦争遺跡群(沖縄県立埋蔵文化財センター2006)でも、数十基の掩体壕が見つかっている。これらはいずれも、段丘上や山間部に構築された陣地であり、壕や塹壕に伴って掘られている。

今回の護岸の銃座の調査で検出された土坑の規模と類例の掩体壕とを比較すると、深さに差異がみられ、護岸の銃座の掩体壕自体の深さは他より浅い。これは、類例の掩体壕が、斜面や平地など遮蔽物のない箇所に造られているのに対し、本遺跡には護岸堤防があるため、その高さを加味して浅く掘られたとみられ、上述した護岸底面~土坑底面の高低差は、類例の掩体壕と同様のおよそ100cmの高さである。銃座のサイズと掩体壕の深さを鑑みると、射撃時にかがんだ状態、あるいは膝立ちの状態で使用されることを想定した深さと考えられる。



第8図 護岸の銃座と掩体壕(K-42)



第9図 試掘調査で出土した遺物(K-38、42)
(うるま市教育委員会 2023)

3. 聞き取り調査

本調査は、令和3年度に実施した川田地区の護岸の銃座の発掘調査に伴って、関連する情報を収集する目的で実施した(うるま市教育委員会 2023)。川田地区の住民を対象として聞き取り調査を行い、既に記録として公開されている情報との整合性を確認した。

護岸の銃座に関する情報を収集することが目的であるが、戦後70年以上が経過した現在、当時の状況を知る者はほとんどいない状況である。銃座の構築作業に直接関わった情報となるとさらに収集が困難である。そのため聞き取り調査については護岸の銃座に限定せず、川田地区の戦災状況や戦時中の川田地区の様子、戦後の護岸周辺の様子に至るまで聞き取り対象を広げ、戦前～戦後の川田地区を俯瞰できるような以下の内容を主軸として聞き取り、調査成果をまとめることとした。

聞き取り調査の主体内容

- ・主に戦前生まれの方を対象として、護岸の銃座についての情報を聞き取る。
- ・戦後生まれの方を対象として、親や親戚、その他の故人から聞き覚えなどの情報を聞き取る。
- ・川田地区の戦前～戦後の状況について情報を聞き取る。
- ・川田地区住民を対象とした、過去の聞き取り調査成果や文献資料の内容と照合する。

以上の内容を中心に4名[Aさん：昭和11年生まれ/川田在住、Bさん：昭和21生まれ/川田在住、Cさん：昭和22生まれ/川田在住、Dさん：昭和9生まれ/川田在住]に聞き取り調査を行った。紙幅の都合上、すべての内容を記載することができないため、聞き取り調査で得られた情報の内、本稿に関する内容を以下に記す。

Aさん

- ・銃座は中城湾港から上陸してくる米軍に対して銃で向かうというふうな目的で造られた。
- ・小銃と機関銃という少し大きい物、たこつぼも大きくして設置した。設置はしたけれども、これは一発も撃っていない。
- ・大砲陣地は、大田の方に設置され、上の方には具志川向けにあり、2箇所ある。それも一発も使っていない。
- ・護岸の工事の責任者は、上江洲亀寿さん。
- ・勝連城跡からは、石材をほとんど人力で運び出した。石材を切って、少しは細工して、護岸工事に使った。かっちゃん(勝連)にイシゼーク(石大工)というのがいた。
- ・農地の潮の被害を防ぐために、防風林としてモクマオウを植えた。護岸作った後に昭和17年くらいかな。

Cさん

- ・戦車壕もあったと聞いている。

- ・たこつぼは一人用は一人、二人用は二人で入る場合もあったんですって。
- ・母は穴掘りをした体験者です。竹槍の訓練をした。
- ・戦車壕は、前原まで続いている。
- ・この銃座自体は、日本兵がハンマー、ツルハシで割った。
- ・(川田の銃座の作業割り当ては)地域住民。大田からもきている。
- ・護岸が昭和8年にこの一帯にできてから、1944年の工事で銃座の穴が空いた。
- ・その下の琉球石灰岩は、勝連城跡の石。勝連城跡の石が埋まっている。

Dさん

- ・1mの丸い穴を掘って、そこに入れるようにした。
- ・戦前の与那原倶楽部は事務所だった。ここに北海道の中隊みたいな軍が14～5名くらいいた。上の人が大尉だったから遊びによく行った。この人たちも、子供がきたらこの大尉は軍刀を抜いて見せたり、とても優しかった。中学校とか兵隊たちが行って、北海道の歌を合唱みたいによくやっていた。ヤーレンソーランソーランとか言って。

沿岸部の陣地構築の一つとして構築された護岸の銃座は、掩体壕も含めて1944年の夏ごろから十・十空襲前までに、構築作業が行われていたことがこれまでの聞き取りによって証言が得られており(具志川市史編さん委員会2005a)、今回の調査でも1944年に造られたという情報が得られた。範囲は前原から川田までの約2.5kmにおよび、銃座の数も構築途中のものや半壊のものも含めると119基確認されている。作業の人員は住民も動員して作業が行われ、下原だけでなくその周辺の宮里や江洲からも徴用として参加していることを踏まえると、米軍の中城湾からの上陸を想定していたことが窺える。銃座の作業では男女問わず招集し、兵隊が住民を指導して作業が進められ、ハンマーや薪割り用の斧を使用して銃座を造ったという具体的な構築作業も今回の聞き取り調査から情報が得られた。銃座に伴って護岸の陸側に掘られた掩体壕については、幅や深さには一人用や二人用があったことが聞き取れた。試掘調査で検出された掩体壕とみられる掘り込みは(K-38、42)、直径約90～130cm、銃座底面からの深さ約100cmでおよそ一人程度の規模を示しており、聞き取りの内容と合致するものといえる。

今回の聞き取り調査でAさんの語った、小銃と機関銃という少し大きい物、タコツボも大きくして設置したことと、Cさんの語った、たこつぼは一人用は一人、二人用は二人、という銃座の詳細について触れており、新たな情報を追加することができた。また、興味深い証言として護岸堤防の土台の石材は、勝連城跡の石材が使用されたと証言がされており、Aさんは、護岸の下の琉球石灰岩は、勝連城跡の石であると語っている。護岸の土台部分は、石灰岩の切り石を海水面から立ち上げており、定形の石と不定形の石を用いて矢羽積みになっている。加えて、石と石の隙間には補強のためのモルタルが充填されている状況が確認できた。これらの石材は勝連城跡のどこから持ち出されたのか定かではないが、勝連城跡には城壁が確認できない箇所があるため、そこから持ち出されたことが想定できる。

4. まとめ

考古学的手法を用いて戦争関連遺構である銃座を調査した。併せて地域の聞き取り調査を実施したことにより、護岸及び銃座の構造的な詳細情報は発掘調査から得ることができ、銃座の構築に至る社会的環境及び組織体制は聞き取り調査や文献から得ることができた。両方向からの調査により得られた情報が補完しあい、当時の空間的な状況を詳細に記録できたと考える。

これまでに行われた戦争体験の聞き取り調査（具志川市史編さん委員会 2005b）の中から、護岸の銃座をはじめとした軍事施設に焦点をあて、今回得られた情報を整理し、日本軍の当該地域での動向や地域住民との関係等、詳細な動向を時系列で示した(第2表)。

日本軍は、米軍が東海岸から上陸することを想定して東海岸の要塞化を図り、この中でも護岸の銃座は、沿岸部から侵入してくる敵を阻止するための障壁、いわば防壁的な役割を担った構築物であると考えられる。銃座の後方には、戦車の戦車壕を構築し、高台には指揮所や砲台等、後方支援ができる施設も設置しており、具志川の海岸から丘陵上にかけて幾重にも防衛網を展開させていたことが分かった。

現在、これらの軍事施設は、無くなってしまったものもあるが、残されている遺構については考古学的調査は未着手である。戦争を再び繰り返さないためにも、聞き取り証言とともに実際の遺構とあわせ、凄惨であった当時の状況を記録し、戦争に至った経緯を整理することが重要である。そして、私たちはそれを学び、同じ過程を歩むことを避けて行かなければならない。

第2表 聞き取り調査から復元した具志川・下原地域の動向

年	1930	1933	1934	1944	1945
川田					
塩屋					
豊原					
前原					
高江洲					
大田					
部隊の動向					

下原の護岸堤防に銃座が構築された。これに伴って掩体壕掘りも行われた。下原の他、大田や上江洲、宮里からも人員が動員された。

泡瀬から塩屋付近まで戦車壕を構築。十・十空襲頃には作業は終えていた。

幸崎（タカムヤ）に陣地壕構築。十・十空襲前に完成。

空襲後、ウフワタジュル後ろに仲喜州国民学校壕を構築。

大田の大川原に指揮所を構築。住民も動員された。

高江洲設置

(球)：独立混成44旅団第15連隊 (山)：第24師団歩兵第89連隊第二大隊 (石)：第62師団

引用・参考文献

- うるま市教育委員会 2016 『護岸の銃座—中城湾港豊原海岸老朽化対策緊急事業に伴う緊急発掘調査—』うるま市文化財調査報告書第28集 うるま市教育委員会
- うるま市教育委員会 2023 『護岸の銃座—中城湾港海岸(川田海岸)海岸堤防老朽化対策緊急事業に伴う緊急発掘調査報告書—』うるま市文化財調査報告書第41集 うるま市教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI) —八重山諸島編—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集 p.50 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 『沖縄県の戦争遺跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第75集 pp.176-178 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019 『神山古集落』沖縄県立埋蔵文化財センター第99集 pp.27-30 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 具志川市史編さん委員会(編) 2005a 『具志川市史』第五巻 戦争編戦時記録 pp.385-390,1007-1008,1021-1022 具志川市教育委員会
- 具志川市史編さん委員会(編) 2005b 『具志川市史』第五巻 戦争編戦争体験記録I pp.783,797,825,836,843,847,849 具志川市教育委員会

Survey of Rifle Pits constructed along the coast of Uruma City, Okinawa Prefecture

YOKOO Masaki¹・NAKADA Shinichiro²

¹ Uruma city Board of Education

² China town Board of Education

Abstract : This report is survey of Rifle Pits constructed along the coast of Uruma City on Okinawa Island's eastside, when Pacific War. Uruma city Board of Education excavated Rifle pits and so interviewed for residents about situation of constructed Rifle Pits and the area at that time.

As the result of survey, we could find structures of seawall and Rifle Pit and get informations of area residents and Japanese troops when constructed Rifle Pits. Rifle pits were constructed for the invasion from Pacific Ocean by Japanese troops and mobilized residents. And we could excavate some trench defending oneself against enemy's attack. The situation of then in this area was sorted out by combining these results.